七・五・三祝福式 の ご案内

主の御名を賛美いたします。

すがすがしい秋晴れの今日この頃、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

聖学院教会では、毎年11月の聖日礼拝にて【七・五・三祝福式】を行なっています。

七・五・三は別記のように、私たちの国で古くから守られてきた美しい風習で、子どもたちの成長と健康を祈る人々の愛情に満ちています。そこで、私たちの教会においても、神さまの愛によって生命を与えられた子どもたちへの祝福を、この日本の美しい風習にならって、お祈りしています。

【七・五・三祝福式】は、６月の第二日曜日に持たれるすべての子どもたち（中学生まで）への【子ども祝福式】と対をなすものです。七才、五才、三才（男女の区別なし）のお子さまがいらっしゃるご家庭は、どうぞご遠慮なくお申し出下さい。なお、準備の都合上、11月10日（日）までにお申し込みください。

皆さま方のご家庭すべてに、主の祝福が豊かにありますようにお祈りいたします。

2024年10月13日

日本基督教団　聖学院教会
牧　師　赤田　直樹

七・五・三 祝 福 式

2024年11月17日（日）聖日礼拝にて

～午前１０時３０分より（祝福式そのものは１０時４５分頃から）～

礼拝後、集合写真を撮らせていただく予定です。できるだけ、礼拝終了後までお残りください。なお、礼拝の中で、自由献金がなされますので、どうぞご協力下さい。また、礼拝説教の間に子ども達を緑聖ホールにてお預かりすることもできます。広い礼拝堂と緑聖ホール共に十分換気などに気を付けております。

・・・・・・・・・・・・・・・キ・・・・・・リ・・・・・・ト・・・・・・リ・・・・・・・・・・・・・・

＜七・五・三祝福式＞申込書

（ふりがな）

お子さまのお名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　年　齢 ＿＿＿＿才

性別　　男　　女　　保護者氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご住所　〒

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　TEL＿＿＿（　　）＿＿＿＿＿

「七・五・三」の由来

この風習が日本各地で行われるようになったのは古い時代からのようであるが、いわゆる「七・五・三」として祝われるようになったのは江戸時代中期からのことである。

七・五・三という年令も、もとは決して確立したものではなく、四才を祝う風習も諸地方であったが、次第に奇数を陽の数とする中国の儒教思想に影響されてこの数が固定してきた。この時に着せる着物や持たせる飴も現代の風潮と同じく、商業主義によるものである。

しかし、宗教的、社会的意味も決して小さくない。古来わが国では「七つ前は神の子」とされて、一人前の人格とはみなさず、それまでに死んでも本葬をしなかった。それはその子の魂がまた親のもとにかえって別の子に生まれ変わるという信仰があったからである。七つまでの子は「若葉の魂」と呼ばれて、生き生きとはしていたが、それだけにまだこの世に定着せず、あの世とこの世を不安定に行き来すると信じられていた。

宮座長や人別長に記載されるのも七才からであった。それを「氏子入り」と呼び、村の正規の一員に数えられることになる。そして子供組に加わり、村の祭礼、年中行事に参加する資格を得るのである。ドイツの教育者シュタイナーも人の成長を七才毎に区切って論じている。

「三つ子の魂、百までも」という諺もある。子どもの霊魂と肉体とがしっかり結合し、成長することを願って祝うこの風習は、たしかに人間形成の現実を見すえたわが国の良き宗教的伝統である。

11月15日という日付もそう古くから決められていたわけではなく、また現代でも決して固定したものでもない。ただ実りの収穫の喜びと結び合わされた日付であることは間違いなく、稲穂や種々の作物の実りを感謝すると共に、子どもの成長と健康、長寿を神さまにお願いをするのである。

（『日本民俗事典』より）

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

（マルコによる福音書10章13～16節）